

【11月第4週のメッセージ】

- 日時：2020年11月22日（日）
- 場所：立川教会
- 説教題：「自分自身の内に塩を持ちなさい。」
- 聖書：新約マルコによる福音書9：30-50（新p79）
- 讃美歌：211「朝風、静かに吹きて」、224「我らの神」

お早うございます。

秋の深まりを覚えます。

コロナの感染拡大が止まりません。

お互いに感染には最大限の注意を払いつつ、この試練の日々を乗り切りたいと思います。

会堂全体の消毒と換気はすでに行っていますが、さらに私たちに出来ることの一つとして礼拝時間の短縮があります。通常60分の礼拝ですが、40分を目指したいと思います。先週は5分短縮の55分でした。今日はさらに5分短縮して50分で終わることが出来ればと思います。

30節です。

30：一行はそこを去って、ガリラヤを通過して行った。しかし、イエスは人に気づかれるのを好まなかった。

31：それは弟子たちに、「人の子は、人々の手に引き渡され、殺される。殺されて3日の後に復活する」と言っておられたからである。」

32：弟子たちはこの言葉が分からなかったが、怖くて尋ねられなかった。

イエス様の名がユダヤ全土に知れ渡り、安息日をめぐるとの対立によって早くも第3章6節においてファリサイ派の人々やヘロデ派の人々から命を狙われるようになったイエス様は、出来ることなら人々の関心を引き集めることは避けたいと思っていました。目立てば目立つほど、敵対者との間で軋轢を生むことが分かっていたからです。

マルコによる福音書は16章あります。

その半分以上を読み進んで来た私たちは、イエス様が何度も人目を避けたりする場面や、自分の行った力ある業について他に知られないようにとの沈黙の命令を出されたことに気が付きます。イエス様は、御自分を自ら進んで世に表そうとはされませんでした。神様から与えられた使命を、世は理解出来ないからです。しかし、会堂で語られる言葉の一つひとつの持つ権威や、飼う者のない羊のような人々を憐れみ、顧みる行動、そして、身体の病や障がいに苦しむ人々になされた癒しの業によって、人々はイエス様を探し求め、慰めと安らぎを得、又癒されたいと願ったのです。

しかし、人々の願いに答えれば答えるほど、身の危険は増し、ペトロの告白以降、弟子たちに十字架の受難の時が迫って来たことを告げ始めます。ただ、弟子たちは、イエス様の受難がどのような意味を持っているかは分からず、又それについて尋ねることも出来ませんでした。恐ろしかったからです。

続いて、33 節、ガリラヤ地方の伝道の拠点であった所に戻って来ます。

33：一行はカファルナウムに来た。家に着いてから、イエスは弟子たちに、「途中で何を議論していたのか」とお尋ねになった。

34：彼らは黙っていた。途中でだれがいちばん偉いかと議論し合っていたからである。

35：イエスが座り、12 人を呼び寄せて言われた。「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」

36：そして、一人の子供の手を取って彼らの真ん中に立たせ、抱き上げて言われた。

37：「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしではなくて、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。」

33 節から 37 節にわたって語られたイエス様の言葉はとても大切です。

ここでは、35 節の「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい」との言葉に注目したいと思います。

この言葉を理解する手がかりとなる言葉があります。

それは、自分にして欲しいと思うことを他の人にしなさいと言う言葉です。

イエス様が、捕らえられる前、土にまみれている弟子たちの足を洗ったこともそうです。

足を洗うのは、奴隷の仕事でした。

その地位にまで降りて、人に仕えなさいと言うことです。

36 節の言葉もそうです。

当時の社会において、子供は人格を認められた存在ではありませんでした。

養子縁組をする場合でも、その対象は子供ではなく成人でした。

子供は母親の付属物としてしか認められていませんでした。

まして、ここでイエス様が抱き上げた子供は、ある注解者によれば、奴隷の子供であったのではないとも言われます。つまり、人格を認められていない奴隷の、さらに母親の付属物でしかない子供を、イエス様は受け入れよと言われていました。

受け入れるとは、自分と同じ価値を持つ者と考え、自分がして欲しいと思うことは、彼／彼女にもすることです。即ち例えて言えば、奴隷やその子供たちの足を洗うことです。そのことによって、イエス様を受け入れ、さらにはイエス様を遣わされた神様を受け入れることになるというのです。

すべての人の後になり、すべての人に仕えるとは、他者が、あるいは自分より優れた者、自分より価値ある者、自分より神様に愛されている者とし、敬愛することです。

そのような事が出来るでしょうか？

自分の周囲を見回して、自分以外の全ての人、あるいは自分より優れ、存在する価値があり、神様に愛されている、それ故に敬愛する事が出来るでしょうか？

困難な事です。

家族や親しい友人たち、共に礼拝を守る教会関係者などの間では出来るかも知れません。しかし、意見を異にし、価値観を異にし、さらに攻撃さえしてくる人がいたとして、その人に対してまでも敬愛の念を抱くことは難しいです。

にもかかわらず、イエス様は言われています。

敵を愛し、迫害する者のために祈れと。

どのようにしたら、この教えに生きることが出来るでしょうか。

そのためには、イエス・キリストの十字架を仰ぎ見ることです。

一体何のために、誰のために、イエス様は十字架に架けられたかを知ることです。

そして自分を見つめ直した時、これまでとは違った世界が、他者との関わりが生まれて来ます。

古いものは過ぎ去り、全てが新しくなる。

イエス様の十字架を仰ぎ見ることによって自分を見つめ直し、復活の光のもとに己の人生が照らし出された時、人との関わりにおいても全てが新しくなるのです。

さらに読み進めましょう。

38 節から 41 節です。

38：ヨハネがイエスに言った。「先生、お名前を使って悪霊を追い出している者を見ましたが、わたしたちに従わないので、やめさせようと思いました。」

39：イエスは言われた。「やめさせてはならない。わたしの名を使って奇跡を行い、そのすぐ後で、わたしの悪口は言えまい。」

40：わたしたちに逆らわない者は、わたしたちの味方なのである。

41：はっきり言うておく。キリストの弟子だという理由で、あなたがたに一杯の水を飲ませてくれる者は、必ずその報いを受ける。」

ヨハネのセクト主義に対する厳しい批判でした。

ヨハネの行動は、自分たちが出来なかった悪霊を追い出す行為を行っている者に対する嫉妬から出たものです。そして、その者が自分たちの仲間にならないので、その働きを止めさせようとしたと言うのです。それに対し、イエス様は、私たちに逆らわない者、敵対しない者は私たちの味方であること、そしてイエス様の弟子だという理由で一杯の水を飲ませてくれる者は、必ずその報いを受けると言われました。この言葉は、私たちに希望を与えます。イエス様に従う者の歩みを支え励ます者は、報いを受けると言うのです。

42 節から 48 節は、恐るべき言葉が続きますが、実際にそのように行えと言うものではありません。イエス様に従うことはそれほどまでに真剣な生き方が求められるのです。

42：「わたしを信じるこれらの小さな者の一人をつまづかせる者は、大きな石臼を首に懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がはるかによい。

これらの小さな者とは、イエス様に従う者を意味します。つまづかせるとは、信仰を失わせることです。つまり、イエス様を信じて、従う者たちから、信仰を失わせる者に対する警告です。

手、足、目と言う、身体の表面にある生活を営む上で最も大切な物との比較において、信仰を失わずに生きることが、どれほどの価値を持つことかが語られます。

43：もし片方の手があなたをつまづかせるなら、切り捨ててしまいなさい。両手がそろったまま地獄の消えない火の中に落ちるよりは、片手になっても命にあずかる方がよい。

45：もし片方の足があなたをつまづかせるなら、切り捨ててしまいなさい。両足がそろったままで地獄に投げ込まれるよりは、片足になっても命にあずかる方がよい。

47：もし片方の目があなたをつまづかせるなら、えぐり出しなさい。両方の目がそろったまま地獄に投げ込まれるよりは、一つの目になっても神の国に入る方がよい。

48：地獄では蛆が尽きることも、火が消えることもない。

信仰を失わずに生きる時、私たちは永遠の命に与り、神の国に入ることが許されます。

最後の 49、50 節。

49：人は皆、火で塩味を付けられる。

50：塩は良いものである。だが、塩に塩気がなくなれば、あなたがたは何によって塩に味を付けるのか。自分自身の内に塩を持ちなさい。そして、互いに平和に過ごさない。」

今日与えられた御言葉のまとめです。

火は精錬する意味を持っています。

塩は、腐るのを防ぐ保存する力を持つだけでなく、人を歓迎する歓待の用途にも使われました。

塩は信仰を意味します。

火によって精錬された、純粹な、命漲（みなぎ）る信仰を我が内に持ち続けること、そして、自分にして欲しいと思うことを他者になし、互いに仕え合う平和の内に生きることをイエス様は教えられました。

この1週間、「自分自身の内に塩を持ち」「互いに平和に過ご」す日々を送ろうではありませんか。

祈りましょう。

第6回「青年の夕べ」

■日時：2020年11月22日（日）

■感話：「25歳のリアルと神の国の実現」湯田大貴（会社員）

■聖書：聖書：ルカによる福音書第17章20-21節

■讃美歌：1-320「主よみもとに近づかん」・1-124「みくにをみくらをも」

25歳のリアルと神の国の実現

みなさん、こんにちは。湯田です。

今日はこうして、青年の夕べで話せる機会をいただけてとても嬉しいです。

2020年はあっという間に過ぎ去ってしまいました。

自分は去年の秋に新卒の会社員としてお仕事を始めて、この3月からは完全リモートワークに移行して今もそれは続いています。

平日はほとんど人と直接会わない生活になってもう8ヶ月です。

1人の時間が増えたことで、自分を見つめる時間も増えたなと感じています。

今日はそんな孤独の中で感じたこと、考えたことを少し話せればと思います。

色々考えたのですが、今回は3部に分けてお話しします。

というのも外に向かう言葉と内に向かう言葉、両方を大切にしたいと考えたからです。

自分を深く見つめ、できるだけ素直な言葉を等身大の言葉を紡ぎたいとも思ったし、

一方でみなさんにも直接伝えたい言葉もあるなと思ったからです。

今話している第一部は外に向かう言葉でお話ししています。

この後、第二部は内に向かう言葉でお話しして、最後の第三部でまた外に向かう言葉で話したいと思います。

第二部は随筆のように自分の思いを徒然と書いてきたので、聞いてくださると幸いです。

—————

自分はたまに本当に一人ぼっちだなと思う。

勘違いなのはわかってるんだけど、地球に1人だけの気分になったりする。

最近はずっとの時間を1人で過ごしているし、自分は生まれてこの方「親友」と呼べる友達に会ったことはない気がする。

いわゆる「いつめん」みたいないつも一緒に遊ぶグループみたいなのもできたことがない。

幸運なことに恋人はいる。でも家は少し離れているのでそんなに頻繁に会うわけでもない。

孤独。

自分はずっと孤独が苦手だと思っていたが、どうやらそうではないらしい。

それが、このコロナ禍の中でよくわかってきた。

大学院時代は孤独に喘ぎ、生活が苦しかった。

勉強や研究自体は楽しかったが、生活が苦しかったので、phD への進学を諦めることにした。

でも本当は孤独が辛かったわけではなかった。

家で1人でインターネットをむさぼり無駄に時間を消費していたことが辛かったのだ。

リモートワークになり、ずっと1人で仕事することになったが、孤独であっても緩やかに社会とのつながりがあり、自分の責務を果たしている感覚になれば全く辛くなかった。

自分は孤独の中でとても安定していた。

だからこそ、色々と考えを巡らせた。

社会人になって2つ大きく変わったと感ずることがある。

一つは自由になったということだ。

なんでも自分で決められるようになった。

今の仕事を続けるのもやめるのも自分の自由。大学に戻ったっていい。

何にお金を使うか。何に時間を使うかも自由。

少なくないお金を稼ぐようになって、自分が社会の経済活動に参加している感ずもある。

毎日の購買は選択だ。購買だけじゃない。



寄付したっていい、投資したっていい、もちろん教会への献金だってある。

社会から問われている気がする。

自分が何をして生きるべきか。

何もしないで生きていたら、今のままの社会を肯定することになる。

子どもの頃は、大人になったら、影響力を持つようになったら、社会をこう変えたいという思いがあった気がする。

今がまさにその時期なんだろうと思う。

さあもう「将来は」なんていう言い逃れはできない。

大きく変わったと感じるもう一つのことは、出口が無くなったということだ。

学生の頃はとりあえずの出口があった。

大学受験とか卒論とか修論とか。とりあえずそこに向かって頑張ればよかった。

4年間だけとか、2年間だけという縛りが、日々の生活に良い緊張感を与えてくれた気がする。

将来像も簡単に想像できた、きっと来年はこんなことをして、再来年はこんなことをしているだろうという。

でも今は違う。

来年どころか半年後すらうまく描けないでいる。

もしくは、ただこのまま日常が続くか。

終わりを意識するからこそ、今が輝くということがあると思う。

出口がないと終わりが意識ができない。

終わりが意識できないと、毎日が日常に埋もれていく。

日々の繰り返しの中で、生活が薄れていく。

目の前の雑務をとりあえず一生懸命にこなしていると今日が終わる。

結局ずっと部屋の中でパソコンに向かって指を動かしていただけだ。

自分はこの2つの変化のギャップに苦しめられている。

一方は、自由になったからこそ、社会から問われている自分の責任。

もう一方は、出口のない日常に引きずり込まれてその場で立ち止まっているような感覚。

仕事が辛いわけじゃない。

人間関係が辛いわけじゃない。むしろ恵まれている。

毎日の仕事は楽しいし、人間関係も良好で、待遇だって良い。

でも、心のどこかで満たされない思いを抱えていた。

生活の中に神様を感じる事が少なかった。

僕は神様の臨在を求めている。

少しコロナ禍も落ち着いた10月、僕は二組の夫婦に家に招待された。

一組は何度かおうちにお邪魔したことがある icu 時代の友人のクリスチャンの両親。

—

午後くらいに家を訪れる。暖かく僕のことを迎えてくれる。

少し近況報告をして、いつも恒例の聖書の学びの時間だ。

今日は箴言を読む。

この家の聖書の学びは、聖書を細かく部分部分を読むのではなく、

構造的に読むのが特徴だ。

箴言をこんなにマクロな視点で読んだことがある人も少ないだろう。

2,3時間くらい学びの時間をして、少し休憩をして

夕食を一緒にいただく。

ああいつぶりだろうか。

人と家で食べる食事は。

主菜に主食に副菜にスープとワイン。

テーブル一杯にお皿が並ぶ。

お祈りして、いただきますして、乾杯をする。

主菜を一口、口にして、次にご飯、その後スープ。

美味しくて涙がこぼれそうになる。

幸せで幸せでいつもよりお米も甘く感じる。

すごく満たされたような気分になったその時に奥さんが一言、

「ここに神の国があるよね。こうやって、湯田くんと一緒にお祈りして、聖書を読んで、食事して。」

そう言われて自分も

「ああそうだな。きっとこれが神の国なんだ」

と思った。

心が温かい。

平和に満ちている。

優しい気持ち。

誰も自分のことを否定しない。

御心にかなっている。

招かれている。

愛の空間。

「神の国は、実にあなたがたのただ中にあるのだ」とイエスは語った。

ここに神の国の似姿がある。

ここにいる誰もがキリストの似姿に近づく。

神の国の建設のために僕は遣わされている。

それが改めてわかった時に自分の心は震えた。

久しぶりに神様の臨在を感じた。

スピってるって思われてもいい、確かにそう感じたんだから。

むしろスピれるならスピれるだけスピりたい。

普段のお仕事で成功すると嬉しい。

でも、本当の意味で、心が喜び joy を感じるのはそこに神様がいる時だけだ。

—

以上が第二部でした。

さて、皆さんは「神の国」をどう捉えていますか？

意外と同じキリスト者でも神の国に対する感覚は違うのではないかなと思います。

神の国は終末とともにやってくるものだと感じている人が多いのかなと思いますがどうでしょうか？

そして終末はいつか盗人のようにいきなりやってくるのだ、

と信じている人も多いでしょう。

終末がいつの日かいきなりやってきて、最後の審判があって、

信仰があれば神の国に入ることができる。

そういう世界観を持っているキリスト者の方は多いのかなと思います。

自分はそういう風な終末論的な神の国観もありますが、一方で神の国はこの地上においても部分的に実現しているものだと思っています。

最後、終末が来たときに神の支配は完成するが、今の時代も神の支配が部分的に実現している。

数学的に言えば、ローカル局所的って感じですね。

「御国を来らせたまえ

御心の天になる如く地にもなさせたまえ」

と僕らは祈りますね。

本当にその通りだなとアーメンだなと思います。

どうかこの地上において少しでも多くの人が御心にかなうような働きをして神の国が実現することを願います。

皆さんはカントの目的の王国を知っていますか？

僕は哲学をきちんと勉強したことはなく、倫理の時間で少し勉強しただけなのですが、

当時からカントの手段と目的の議論が好きでした。

他者を手段としてではなく、目的として扱う。

何か別のものに価値を置き、それを得るために手段として他者を扱うのではなく、

その人自身に最高級の価値を置き、尊厳ある人格として他者を扱うということです。

「目的の王国」は、誰もが目的として尊重されるそんな社会なわけです。

これは自分の記憶なので間違っている可能性もあるのですが、

戦後の東大初代総長でクリスチャンの南原繁は著書の中で、

「目的の王国」はカントなりの「神の国」理解を表しているというようなことを語っていました。

僕もこの「目的の王国」とはまさに「神の国」をキリスト教の言葉ではなく哲学の言葉に翻訳したものだと言えると思っています。

さて、神の国、目的の王国はどのようにして実現されるのでしょうか？

そんな社会の実現にはまずは一人一人が自分に対して納得感を持つことが大事だと思います。

僕らはそれぞれ自分の問題を抱えています。

自分に価値がない、人と比べて劣っている、生きていても仕方がないと悩む人。

自分の罪に苛まれる人、自分の中の偽善だったり、一貫性のなさ、人を傷つけてしまう傾向性に悩む人。

執着のある人。物やお金、名声、人からの評価、SNSでの人気に必要以上に執着してしまう人。

恐怖に心を支配されている人。

こういった自分の中の問題をまず解決する必要があります。

そのためには、神様との和解が必要だと自分は考えています。

神様と和解して心の中を平和で満たすことが肝要です。

心の中が平和に満ちていないと、平和を作り上げる人にはなれないと思います。

心がトゲトゲしていたり、不安だったり、恐怖に支配されているときに、他人に優しくするのは難しいです。

神様と和解することで僕らの心は嵐のように静まることができますと思います。

マルコによる福音書 4 章 35 節。

4:35 その日の夕方になって、イエスは、「向こう岸に渡ろう」と弟子たちに言われた。

4:36 そこで、弟子たちは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した。ほかの舟も一緒であった。37 激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水浸しになるほどであった。38 しかし、イエスはへさきの方で枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして、「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言った。39 イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、「黙れ。静まれ」と言われた。すると、風はやみ、すっかり凪になった。40 イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」

この御言葉は私たち一人一人の心に対しても語られています。

神様からの愛に気づき、しっかりそれを受け止めて

初めて自分自身を受け入れる、自己受容することができるのではないかと思います。

神様が受け入れてくださっている自分という存在を自分自身も受け入れる。

神様が自分を愛してくださっているように、自分自身も自分のことを愛してあげるということなのです。

自分の中に平和が満ちて初めて平和を作り上げる愛の人間になります。

こうして僕らの愛のエネルギーは外へと向かうわけです。

自己の問題を解決した次は他者との 1 対 1 の関係です。

最も大切な関係は、あなたの大切な人との関係です。

パートナー、親友、父親、母親、兄弟、先生。

最も大切な関係が崩れていては、他の関係も崩れてしまうと僕は考えています。

愛のある家庭は、パートナー同士の愛の関係から生まれる。

ところで、皆さんは藤井風というアーティストを知っていますか？

残念ながら今年の紅白出場は叶いませんでしたが、間違いなく今年を代表する Jpop アーティストの1人だったなと感じています。

彼は今年の5月20日にファーストアルバム「help ever hurt never」をリリースしました。

「常に助け、決して傷つけない」という意味のタイトルですが、インドの聖人サイババの言葉が元のようにです。

2020年5月、社会全体が最も優しさを失っていた時期にこのアルバムがリリースされたことは大きな意味があったように思っています。

タイトルの通り優しさにあふれたアルバムだったからです。

そしてこの help ever hurt never の姿勢こそが他者との関係。

愛の関係において最も大事なんじゃないかなと思うわけです。

違いを認め、受け入れ、想像する。尊重する。

決して傷つけない。否定しない。

愛する。

そしてこの対一の愛の関係を越えた先にあるのが、愛の空間です。

誰もが優しくなれる空間。



愛の満ちた空間。

神の論理が働く場所。

Safe Space

心が安全に感じる場所。

僕は愛の空間を作り上げていきたいです。

愛の空間が存在しているとき、誰もが優しくなれ、心の中に喜びが溢れると信じているからです。

愛の空間を広げること、これが神の似姿として作られた私たち一人ひとりに神様から求められているものだと思います。

愛の空間の下支えとなっているのが、他者との愛の関係です。

そして他者との愛の関係の下支えとなっているのが、自分との愛の関係。

自分との愛の関係の下支えとなってるのが、神との愛の関係。

そしてこの内、この地上において完成しているのは最後の神との愛の関係のみです。

キリストは2000年前に十字架につけられ、復活し、最後天に昇りました。

そのときに聖霊を私たち一人ひとりに送っていただきました。

この聖霊の働きによって僕らは神様の愛を豊かにうけることができます。

だから、神様の愛はこの地上において完成しています。

しかし、この地上は神の支配が完璧ではないので、

決して自分の問題も他者との関係も空間の構築も完璧に解決することはありません。

むしろ何度も何度も対峙する必要があります。

ただ救いは、その問題を解決する手段が与えられていることです。

それが神様の愛です。

神の愛は地上においても完成しているので、僕らはここに還ることで他の地上の問題に立ち向かうことができるのです。

さて、皆さんに問いかけていたことが最後に2つあります。

一つ目は、「何を大切にしてい日々生きていますか？」ということ。

2つ目は、「どこに向かってあなたは歩んでいますか？」ということです。

「何のために生まれて何をして生きるのか、わからないままなんてそんなのは嫌だ」

まさに冒頭の自分の悩みはこれだったなと思います。

社会人になって自由になって責任が生じているのに、出口のない日常に引きずり込まれてしまっている自分。

でも今はこの問いにしっかり答えられる気がします。

僕は信仰と希望と愛を大切に生きています。

そして、神の国、愛の空間、神の論理が働く場所の完成を夢見てそこに向かって歩んでいます。

最後に一言お祈りします。